

継ぐ

国史跡・伊達氏梁川遺跡群と

守り継ぐ人々

くにしせき だてしやながわいせきぐん
国史跡・伊達氏梁川遺跡群

独眼竜・伊達政宗につながる伊達氏が、1532（天文元）年まで本拠とした伊達氏館跡（梁川城跡）と城下からなる遺跡。2019（令和元）年に国指定となった。2022（令和4）年12月、梁川八幡神社一帯を含む「堂庭遺跡」と「岩地藏遺跡」を新たに追加指定するよう、国の文化審議会から文部科学省へ答申された。

伊達氏のルーツと想いを探る

伊達市は、独眼竜伊達政宗につながる伊達氏のふるさと。伊達政宗は仙台出身ではないの？と思うかもしれないが、ルーツはここ、伊達市にある。

1189（文治5）年、源頼朝軍の一員として奥州合戦に加わった常陸国（現在の茨城県筑西市）の中村氏は、恩賞として頼朝から伊達郡を与えられ、姓を伊達と改めた。高子岡に居城したと伝えられている。

鎌倉初期に伊達に根を下ろした伊達氏は、梁川城を主な拠点としながら勢力を拡大し、室町時代後期には、陸奥国守護職へと上り詰めてゆく。伊達氏梁川遺跡群（以下、遺跡群）は、伊達氏のまちづくりと、その移り変わりをたどることができる貴重な遺跡なのだ。

伊達氏は何を考え、どのようなまちを築こうとしたのか――。特集では、遺跡の意義をひも解きながら、中世都市梁川の姿を思い描く。そして、史跡を守るために行動してきた、地域の人たちの熱い想いをお伝えする。

※1奥州合戦…鎌倉政権の源頼朝が平泉の奥州藤原氏を相手に起こした戦い。

※2守護職…鎌倉・室町時代に置かれた武家の職制で、陸奥国の軍事・行政権を統括した最上位の武士。

第1章 伊達氏の足跡

伊達を拠点に栄華を誇った伊達氏
梁川に刻まれた、足跡をたどる



梁川城跡から出土した「かわらけ」（素焼きの杯や皿）

梁川城は出土品などから伊達氏3代義広^{よしひろ}、4代政依^{まさより}の頃（13世紀前半）に成立したと考えられている。館^{やかた}を中心にとのようなまちをつくり、権力を高めようとしたのだろうか。

祈りと守り…鎌倉期の梁川

今回国史跡に追加された「堂庭遺跡」には梁川八幡神社が所在する。「岩地蔵遺跡」は断崖に作られた磨崖^{まが}仏群^{ぶつぐん}であり、いずれも宗教施設である。国家の安寧^{あんねい}や極楽往生を祈り、宗教を大切にした中世の社会において、宗教施設が果たした役割は非常に大きい。まちの北端と南端に置かれた八幡神社と岩地蔵は、鬼や怨霊



梁川城跡から出土した「青磁片」

といった異界の存在から都市を守る「結界」であったと考えられる。この構造は鶴ヶ岡八幡宮を中心に館群や寺院群が配置された中世都市・鎌倉に似ている。鎌倉をモデルにまちをつくり、宗教を巧みに利用して自らの権威を高め、都市の守りを固めながら国を治めようとした姿が浮かび上がる。

**現存する庭園「心字の池」
室町幕府との深いつながり**

梁川城跡に現存する心字^{しんじ}の池は、これまでの発掘調査で室町時代に成立したものと推定されている。池の西側からは掘立柱建物跡^{ほつたばしら}などが見つかり、主殿^{しゅでん}や会所^{かいしょ}があったとみられる。将軍

の御所によく似た構造で、都の様式を取り入れて整備されたと考えられる。

室町時代、伊達氏がたびたび京都へ行き、将軍らに贈り物をしていた記録が残されている。1483（文明^{ぶんめい}15）年に12代成宗^{せいそう}が上洛^{じやうらく}した記録では、足利義政（室町幕府8代将軍）や夫人の日野富子^{ひのとみこ}らに、莫大な黄金・太刀・駿馬を贈ったとある。この時、成宗が日野富子の御所で庭園を案内されたことも記録されている。

「かわらけ」と呼ばれる素焼きの土器が3000点も出土している。かわらけは、一度使ったら捨ててしまう。清らかな器で酒を酌み交わす「嘘偽りない関係を結ぶ」という意味合いがあり、臣下は忠誠を誓い、当主はその働きに報いることを約束する重要な式典が主殿で行われた。

臣下を招いて都のような宴会をし、伊達氏の繁栄ぶりを見せつける。位の順に並べられる臣下にとっては自分の序列を確認する場でもあっただろう。臣下の出世欲を駆り立て、より強固な関係を結ぶ。時には会所に有力者を招き、酒を交わし、さまざまな交渉や相談をしていたかもしれない。いずれにしても、宴会を開いて交流をすることで人を動かし、領土の拡大や国の安定を図ってきた伊達氏の思惑を、大量出土したかわらけから垣間見ることができる。

※1「主殿」…屋敷の中の最も主要な建物。「会所」…人が会合するための場所。建物や部屋。
※2「上洛」…京都へ行くこと。※3「管領」…室町幕府で将軍に次ぐ役職。

伊達氏梁川遺跡群の

歴史的価値

中世都市がそのまま眠る

梁川八幡神社や岩地蔵などの遺跡が複合体で遺跡群を形成し、全体が中世の都市だとわかってきたことが最も重要なポイントです。堂庭遺跡の発掘で鎌倉時代の土器が出たことで「八幡神社は梁川城の北の鬼門として建てられた」というかねてからの研究がほぼ証明されたと思います。

八幡神社の本殿の位置が鎌倉時代から今までほとんど

継ぐ
国史跡・伊達氏梁川遺跡群と
守り継ぐ人々

Special Interview



（公財）福島県文化振興財団

遺跡調査部 飯村 均さん

いいむら ひとし ●1960年栃木県生まれ、棚倉町出身。学習院大学法学部卒。（財）福島県文化センター遺跡調査課、（公財）文化振興財団総務課長、同財団文化センター副館長などを歴任。

ど変わっていないことも驚きました。伊達氏が桑折、米沢…と本拠を移した時に神社も遷^{うつ}しますが、梁川八幡神社は「元八幡」のような形で残され、大切に祀られてきたのではないでしょう。鎌倉時代に作られた空間が見事に現代まで踏襲されているところが、このまちのおもしろさです。

日本最北・東北唯一

鎌倉をモデルにまちづくりの第一歩を踏み出した伊

達氏が、室町時代には京都風のまちづくりをします。方形の地割をした形跡もみられ、明確な都市計画があったと考えられます。心字の池は特に重要です。将軍家に匹敵する館を伊達氏が持っていたこと自体がすごいことですが、伊達市より北で、このような館跡は他に見つかっていません。日本で最北、東北で唯一の庭園を伴う大名の館だった可能性があり、遺跡群が非常に評価されている点の一つです。

外交や婚姻で勢力拡大

戦国武将は戦争ばかりしていたイメージがあるかもしれませんが、なるべく戦わないで領地を広げようとしています。宴会はとても重要で、守護職になった種宗も外交や婚姻で領地を広げるタイプでした。

かわらけが出土するか否かでその場所の意味合いが変わります。梁川城では間

Report

歴史文化講演会

伊達の魅力 - 歴史から探る! -

伊達氏梁川遺跡群に堂庭遺跡・岩地蔵遺跡が追加されたことを記念して1月21日④に開催しました。1部では遺跡群関連の歴史に加え、霊山や養蚕など伊達市の主要な歴史を市職員が紹介しました。2部のパネル討論には、伊達なふるさと大使

討論を進行する
飯村さん



の3人と須田市長が参加し、改めて感じた伊達の魅力や、これからの未来に歴史をどう生かすか、意見を交わしました。須田市長は、「伊達が歴史のあるまちであることをまずは知る。そして市民が誇りを持てるよう発信していきたい。」と締めくくりました。



（左から）須田市長、小林アリスさん、長沢裕さん、高島英也さん

違いなく頻繁に宴会が開かれていました。都市構造のすばらしさに加え、梁川城の重要性が分かってもらえるところだと思います。伊達氏の権威が非常に高かったことも十分に証明されました。

今後注目したい「古町」

に庶民が住むまちがありました。物流の拠点にまちができるのですが、川沿いにある古町は、地名のとおり古いまちがあった可能性が高いです。古町には観音堂があって、当時の人たちは岩地蔵も見えて暮らしていたでしょう。このような遺跡は全国でも他にないと思いますし、研究の余地がある」と注目しています。



梁川八幡神社 Yanagawa Hachiman Shrine

1582 (天正 10) 年 4 月 1 日に伊達政宗が戦勝祈願に訪れた伊達氏の氏神。伊達六十六郷の惣社として栄えた。政宗の正室愛姫の輿の受け渡しが行われたといわれている。

場 梁川町八幡字堂庭 11 P あり (政宗にぎわい広場前)

龍宝寺 Ryuhoji Temple

梁川八幡神社の別当寺*で、明治時代の神仏分離令*の後に残された貴重な寺。山門と鐘楼は市指定有形文化財。



鐘楼

鬼石観音堂



梁川城跡 Yanagawa Castle Site

鎌倉時代に築城されたとみられる伊達氏館跡。東山文化の影響を受けて作られたと見られる心字の池は、現存する中世の庭園としては東北最古。独眼竜政宗も滞在した記録が残る。

場 梁川町字鶴ヶ岡 1
P あり (梁川城跡南側)



(上) 本殿内部に保管されている狛犬。室町時代～江戸中期頃の作といわれている。(下) かわらけの出土状況。祭祀に用いられたとみられる。



場 梁川町八幡字堂庭 13-1 山門
P あり (政宗にぎわい広場前)

*別当寺…江戸時代以前に神社を管理するために置かれた寺のこと。*神仏分離令…神道国教化のため明治政府が神社から仏教要素の排除を求めたこと。



(上) 梁川城復元図 (福島県立博物館) 平山城であり、奥に見えるのが心字の池。(下) 発掘時に確認された梁川城の「会所」跡。柱の穴が見てとれる。



歩いてみよう 伊達氏のふるさと

中世の

国指定・伊達氏梁川遺跡群を訪ねてみよう。中世の人たちが見た景色を自分の目で確かめて、想いを馳せ、時間旅行を楽しもう。

い〜ない! だて vol.17
伊達氏ゆかりの地
梁川八幡神社、梁川城跡を動画で紹介!



レンタサイクル で巡る

受付
観光案内所 (梁川総合支所 1 階)
利用可能時間
9 時～17 時
利用料金
1 日 500 円 (小学生 300 円)
※ 2 人乗り自転車は 1,000 円
お問い合わせ
伊達市観光物産交流協会
☎ 024-529-7779

史跡ガイド と巡る

案内人 NPO 法人
梁川町歴史文化財保存協会
案内内容 見たい史跡をご相談ください。電話で調整します。
利用料金 無料
予約・お問い合わせ
伊達市観光物産交流協会
☎ 024-529-7779
まちの駅やながわ
☎ 024-573-7235



岩地蔵遺跡 Iwajizo Ruins

広瀬川沿いにある磨崖仏群で、五輪塔や仏像が彫られている。かつて川は南側を流れていたとみられ、東昌寺に続く参道があったと考えられている。

場 梁川町鶴ヶ岡 (広瀬川左岸側の堤防から見るができます)
P なし (梁川城跡駐車場から徒歩 10 分)



(上) 石窟の風化が進んでいるが、五輪塔の形が見てとれる。(下) 岩地蔵の斜め上を阿武隈急行が走り抜ける。



古町観音堂 Furumachi Kannon Hall

別名利生寺観音。東昌寺と関係が深いとされ、伊達氏の創建と伝わる。市指定有形文化財の木造聖観音菩薩坐像が安置されている。

場 梁川町古町 23
P なし (梁川城跡駐車場から徒歩 10 分)

輪王寺跡 リンノウジ

11 代持宗が、祖母の蘭庭禪尼 (9 代政宗の妻で足利義満の叔母) の菩提寺として建てた寺院。

輪王寺跡

やながわ希望の森公園前駅

梁川プール



伝東昌寺跡 トウショウジ

伊達氏の 4 代政依が伊達五山を定めた時の筆頭寺院。梁川高校グラウンドの発掘調査では、鹿苑寺 (金閣寺) と同じ模様の瓦が見つかり、京都と深い関係性が見てとれる。

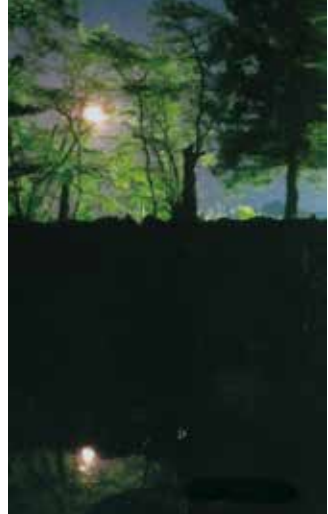
私にとって歴史は、
先人からの、最高の贈り物。
どうしても語り継ぎたい、
いつまでも見守ってほしい宝です。



やまき ぜんべい ● 1933 年生まれ。梁川町史編纂室長、梁川町郷土史研究会会長、伊達市文化財保護審議委員会委員長などを歴任し、現在は「伊達氏梁川遺跡群保存活用計画策定委員会」副会長を務める。2015 年内閣府「エイジレス・ライフ実践」受賞。2017 年「文部科学大臣地域文化功労者」受賞。

られた年代などを調べ、京都の庭園も参考に、往時の姿を再現しました。心字の池東側の石垣は上杉の時代（1600 年代）に作られたと推定されるので、伊達が治めていた時代は吐月森山がきれいに見えたはずです。吐月森山から登る月が水面に写って、それはそれは美しかったでしょうね。

本丸の発掘では香炉やすりが発見されました。茶挽き臼も見つかったんですよ。これは茶室があった証拠です。何度も上洛しては京都の文化を取り入れ、風流を好んだ伊達氏らしい出土品に、心が躍りました。



吐月森山（右奥）から昇った月が、心字の池に映る。（八巻さん提供）

悲願の町史編纂事業

町史編纂室ができたのは 1981（昭和 56）年。12 年越しの決定でした。梁川の歴史があまりに多く、全 12 巻になりました。編纂室を閉じるまで 22 年、史料収集や調査にはずいぶん歩きました。史料を貸してほしい、調査させてほしいとのお願いを快く聞いてくれたまちの皆さんの協力があったからできた事業でした。仲間にも恵まれ、町当局にも理解いただきました。家に帰っても仕事ばかりしていた私を、支えてくれた家族にも感謝しています。

国指定へ…改めて思う 梁川遺跡群のすばらしさ



（上）観光客に梁川八幡神社の歴史を紹介する八巻さん（2015 年）
（下）市民講座や高齢者学級など、数多くの場で梁川の歴史を伝えてきた

指定は、お城を中心に城下町がよく残っていることが認められた証ですから、本当にうれしいことです。堂庭遺跡から鎌倉期のかわらけが見つかったことは、3 代義広や 4 代政依の時代には八幡神社が機能していたということ。梁川城もまた、その時代にはすでに機能していた裏付けになり得るわけです。発掘した人も教育委員会もよくやってくれたと思います。

未来へ…先駆者の願い

歴史公園のような形にし、未来へ…先駆者の願い。指定は、お城を中心に城下町がよく残っていることが認められた証ですから、本当にうれしいことです。堂庭遺跡から鎌倉期のかわらけが見つかったことは、3 代義広や 4 代政依の時代には八幡神社が機能していたということ。梁川城もまた、その時代にはすでに機能していた裏付けになり得るわけです。発掘した人も教育委員会もよくやってくれたと思います。

第 2 章 史跡保存への軌跡

郷土のすばらしい歴史を、自分たちが守らなければ…。後世に残すため、立ち上がった先駆者の想いとは。



Special Interview

伊達市文化財保護審議委員会

元委員長

やまき ぜんべい
八巻 善兵衛 さん

ゼロから始まった保存活動

私が梁川高校に通っていた頃は、本丸の南側や西側にお堀がありました。しかし教員として梁川小学校に着任した頃、鉄道工事の残土をそのお堀に捨て始めたので愕然（がくぜん）としました。「このままでは貴重な史跡が姿を消す」と危機感を覚え、一人ではどうすることもできないので、歴史を守るために郷土史研究会を立ち上げました。1969（昭和 44）年のことです。当時の梁川町には文化財保護条例がなく、町史もありませんでした。各家の土蔵が解体され、保管されていたであろう古文書は姿を消す一方。文化財保護条例を

作って町史を作る。そして史跡を後世に遺す。それが発足時からの願いでした。思い通りには進まない日々…でも決して諦めない

1971（昭和 46）年に文化財保護条例制定を請願し翌年に制定されました。しかし、北三の丸跡に町営住宅の建設計画が進んでいたため、私たちは 1974（昭和 49）年に町内会長全員に集まってもらい、「梁川城を守る会」を結成しました。1000 人以上の署名を集

発掘で明らかになった 歴史の厚み

町史編纂事業はなかなか始まらず、ならば発掘を！と働きかけ、心字の池の復元を目的に、1978 年から 1981 年（昭和 53 年～56 年）に本丸跡の発掘調査をしてもらいました。専門家呼んで心字の池が作

Close up 歴史を知らなくても楽しい 梁川町史



八巻さんが室長としてまとめ上げた梁川町史は「通史編」3 巻、「資料編」6 巻、「各論編」1 巻、「民俗編」2 巻の計 12 巻からなる。町史として県内屈指の巻数をほこる。八巻さんによると「庶民の暮らしを念頭に町史を作る」ことを大切にしていたそう。「梁川町史 12 口伝（民俗編Ⅱ）」では町民から聴き取った昔話や言い伝えを多数紹介している。地名の由来や思わず大笑いしてしまうような昔話などバラエティに富んでいて、歴史を知らない人も楽しめる。

梁川町史
を読む

伊達市立図書館、保原歴史文化資料館などで読むことができます。

時を超えて、同じ場所で、 重なる想い、郷土の誇り

先代も先々代も、そうしてきたから

先祖が明治初期にここに住んでから、代々神社に関わってきました。かつては伊達の総社として、10月15日の祭礼には郡内の神社の宮司が全員集まり、参道には市が立ってにぎわっていたと聞きました。由緒ある神社で、小さい時から大変誇らしく思っていました。

清掃は先代も、先々代もずっとやってきたことです。きれいな方が参拝者が気持ちよくお参りできますからね。体が動くうちは、少しでもきれいにしておきたいと思っています。



梁川八幡神社 氏子
亀岡 整 さん



八幡様周辺整備事業
協議会 代表
丹野 収一 さん

「きれいだった」と思ってくれたらうれしい

大河ドラマで独眼竜政宗が放送された時、たくさんの参拝客が来て盛り上がったんです。地元に住む者としてもっとおもてなしがしたいと思いました。花を植えようという話になった時、参道入り口の田んぼの持ち主の方が快く貸してくれたんですよ。あやめを植えたり、ハスを植えたり、富野自治会にも協力してもらって続けています。

大げさなことはできないけれど、参拝に来てくれた人たちが「あの花きれいだったな」と思ってくれたらうれしいです。なんとか若い人たちに伝えていきたいですね。

「小京都梁川」と呼ばれる日を心待ちに

国指定になるには、史跡がどのように管理・保存されているかは大切なことです。いつ誰が訪れても除草などが行き届いているよう、誇りを持って地道な活動を続けてきました。市民の目線からおもてなしの心で、行政でできない部分への目配りが大事なことだと思っています。

史跡整備や保存の計画はこれからですが、広範囲におよぶ史跡の整備はまちづくりそのもの。5年先、10年先のまちを楽しみにがんばっています。整備されたあとも、縁の下の力持ちとなる地元の関わりは欠かせないものなので、若い人につないでいきたいと思っています。



NPO法人 梁川町歴史文化
財保存協会 事務局長
木村 清四郎 さん

伊達氏梁川遺跡群が守られてきたのは、地域の人々の努力の賜物にほかならない。遺そうと努力した人や、日々守ってきた人がいて、国史跡の指定へとつながったのだ。時代ごとの人々の想いが重なり、さらに深みを増した歴史を、私たちは後世へと伝える必要がある。

先輩方の功績が大きく、少々気負ってしまうかもしれない。でも、「守り継ぐ」ことの一端を担うのは、そう難しくないのではないか。例えば、ちょっと史跡を歩いてみる。その感想を誰かに話してみる。SNSに載せてみる。それだって立派に「語り継ぐ」ことになる。大きな活動じゃなくてもいい。郷土に愛着と興味を持って、少しでも行動することから始めよう。

伊達市に生まれた。伊達市に住んでいる。時代は違っても、同じ場所に生活していること自体が、とてつもない縁だ。私たちは、すでに郷土の歴史を継いでいる。先人に感謝し、郷土への愛と誇りを自分の胸で温めながら、未来へと継いでいこう。

第3章 守り、伝える

遺跡群を守ってきたのは、それぞれの時代を生きた人々。その歴史は、今も、続いている。



拝殿の前を掃く亀岡整さん。「あちこちに箒を置いておかないと広くて大変だ」と笑う。



(上) 参道の脇に丹野さんが植えたハス。7月～8月まで開花期が続き、写真ファンが訪れる。(下) 観光客を案内する木村さん。

地域の人の活動が、歴史をつなぎ、新たな魅力を作る

文化財や遺構が遺されているのは、地元の人たちの日々の努力によるところが大きい。梁川八幡神社では、氏子である富野1区から4区の人たちが、定期的に清掃や草刈りを行っている。梁川八幡神社のすぐそばに住む亀岡整さんは、毎日のように神社の境内を清掃する。参拝者に気持ちよくお参りしてもらうためだ。大風のあとは杉の葉が一面に散らかり、午前中いっぱいかかることもある。誰に頼まれたわけでもないが、

ただ黙々と作業を続ける。新たな魅力を作ろうと声をあげた人たちもいる。八幡様周辺整備事業協議会の丹野収一さんたちは、八幡神社参道の入り口に花を植えて参拝者をもてなしている。2019年に定植した滋賀県草津市のハスが大きく成長し、開花期には、写真好きな人たちが訪れる自慢の名所になった。

NPO法人梁川町歴史文化財保存協会は、梁川城跡の除草や、観光客へのボランティアガイドを行っている。事務局長の木村清四郎さんは、これまで数多くの観光客を案内した。コロナ

で観光客はほぼゼロになったが、木村さんの目線は未来に向けられている。「梁川の歴史に興味を持ってきています。後継者の養成中で楽しみです。国指定になり、

ゴールデンウィーク明けには米沢などからガイドの予約も入って、やっと動き出すかなと期待しています。」市外の人に伊達氏の歴史の魅力を伝えるには、まずは市民に知ってもらう必要がある。木村さんは、市民からのガイド依頼も受け付け、少しでも興味を持ってくれる人を増やしたいと考えている。

地域に“福”を招く／鎮守の森の守り神



約600年ぶりに梁川八幡神社のご本尊を開披した2015年から、フクロウが現れるようになった。雛の姿が見られるのは5月ごろ。愛らしい守り神に会えるのを、地域の皆さんも心待ちにしている。

※史跡ガイドの予約方法は6ページをご覧ください。